



薬学部だより

徳島大学薬学部
May 2009

Vol.4

Faculty of Pharmaceutical Sciences, The University of Tokushima

薬学部

両学科長挨拶

■ 羽ばたけ 薬学部新入生、創製薬科学科第一期生



創製薬科学科長

落合 正仁

Masahito Ochiai

新 入生の皆さん、ようこそ徳島大学薬学部へ。気管支喘息治療薬エフェドリンの発見者であり、日本の薬学の父として創薬研究に邁進された長井長義先生誕生の地、徳島へようこそ。これからの徳島大学薬学部・大学院での学生生活を大いにエンジョイしてください。

徳島大学薬学部には我が国を代表する極めて優秀な、第一線で活躍している教員が数多く揃っております。学生の皆さんはこれらの教員から直接指導を受けることになりますので、その講義や研究指導には大いに期待して下さい。また、思う存分学習し実力をつけて下さい。皆さんが教員と同一の学問レベルにまで到達することは比較的簡単なことです。常日頃から個々の教員の考え方に直接触れることができますので、その考え方や思考方法を容易に吸収できます。教員の学問レベルを乗り越えて更に一段と自分に磨きをかけてもらうことも重要ですが、そのためには自分自身で新たな自分の道を独自に切り開くことが必要になるため、これは格段に難しくなります。皆さんはまずこの教員と同じレベルにまで到達することを目標とし、可能な限り有効に、積極的に薬学部の優秀な教員を利用して下さい。研究室・教室を訪ねて、質問し、議論を楽しんで下さい。

この4月に創製薬科学科（4年制）第一期生が4年次に進学しました。これまでとは制度が変わり、単に卒業しても薬剤師国家試験受験資格は得られない創製薬科学科に昨年

10月（3年次後期）、40名の学生が配属されております。「大学院における専門教育を経て、創製薬科学における第一線研究者を養成する」ための基礎作りが創製薬科学科の主な目的となります。長井長義先生以来の創薬研究における伝統を守りつつ、基礎化学を伝統とする日本の薬学研究を益々発展させる役割が創製薬科学科の皆さんには求められます。大学院薬科学教育部では、博士前期課程（修士課程）での視野を広げる基礎化学教育制度の導入や英語教育の充実、博士後期課程では3名からなる複数指導員体制の構築、教育クラスター制の導入、リサーチプロポーザル制度の導入を図り、大学院教育を充実させる予定です。是非、大学院修士課程、博士課程へと進学し、実験と議論に明け暮れる生活を過ごして研究のおもしろさを満喫して下さい。

薬学部長の玉置教授は、「少々やんちゃでも良い、「私がノーベル賞を取る」くらいの大口をたく若手研究者を育てたいと抱負を述べておられますが、薬学部も負けてはおれません。皆さん、一緒に頑張りましょう。

■ 薬剤師を目指す皆様へ



薬学科長

滝口 祥令

Yoshiharu Takiguchi

新 しい薬学教育がスタートして4年目を迎えました。徳島大学薬学部では薬学の基本を学んだ後、3年後期から薬学科と創製薬科学科に分かれる制度を導入しているため、学科別の実質的な教育は昨秋から始まっ

たばかりです。

薬学科では、医療の担い手としての専門的な知識技能に加え、医療現場での実践力と人間性を併せ持ち、社会から信頼される高い資質を有する薬剤師の養成を教育目標として、医療系学部学科が集結した蔵本キャンパスの特色を活かした学部横断型教育や相互乗入型教育を導入し、医療現場と連携した薬剤師養成教育を推進しています。

本学の薬剤師教育の特色のひとつとして、学科配属と同時に各研究室での卒業研究がスタートしています。医療現場では教科書通りに行かないことが多々ありますが、その様な場面で役立つのが課題発見・解決能力です。卒業研究を通して研究能力を身につけるだけでなく、研究の楽しさを知り、生涯にわたって研究マインドを持った薬剤師として活躍して欲しいと思います。

来年1月、4年生には共用試験（CBT、OSCE）が待ち構えています。5年次に実施される病院・薬局での長期実務実習が従来の見学型から参加型へと、期間だけでなく実習内容も大きく変わるため、実習生として適切な知識・技能・態度を有していることを担保

するために実施されるものです。初めての共用試験に向けてトライアルを重ね、ハード・ソフト両面で準備を進めてきました。あとは学生諸君の出番です。未知なるハードルに不安とプレッシャーを感じているかも知れませんが、新制薬学科1期生として、徳島大学の理念である進取の気風を持って、後輩へと続く道を拓いてくれることを期待しています。

医療の高度化・専門化に伴い、薬剤師もGeneralistから特定領域でより高度な能力を習得したSpecialistとして活躍する時代を迎えています。薬剤師を目指す学生諸君。君はどんな薬剤師になりたいですか。将来、「薬のプロ」として活躍している自分の姿（目標）を思い描いてみてください。まだ、将来の姿が見えない人も、授業やサークル活動、社会活動などを通じて多くのことを学び、多くの人と会うことで、姿が見えてくるはずですよ。そして同時に、コミュニケーション能力など医療人に求められる人間力も養われます。よく学び、よく遊び、そして色々なことに挑戦し、有意義な学生生活を過ごして下さい。

部局間交流協定

■ ノースカロライナ大学薬学部との部局間交流協定



生薬学分野 准教授

柏田良樹

Yoshiki Kashiwada

徳島大学薬学部とノースカロライナ大学 (UNC) 薬学部の部局間交流協定締結のため、高石学部長、土屋教授と同行し、平成21年1月25日に行われた協定締結式に立ち会ってまいりました。

平成18年度から薬学6年制教育が開始されましたが、徳島大学薬学部における薬剤師教育の方向を探るため、文部科学省大学改革推進事業「地域医療等社会的ニーズに対応した質の高い医療人養成プログラム」により、これまで6年制薬剤師教育を実施している米国における教育の現状について視察・調査等を行ってきています。UNC 薬学部に関しては、平成18年度に Dennis M. Williams UNC 薬学部准教授を大学に1週間招聘して講演会を実施しており、平成19年には臨床薬剤師教育システムの視察を行っています。また、徳島大学病院薬剤部の薬剤師も Williams 准教授の指導の下で UNC 大学病院において薬剤師業務研修を行っており、臨床薬剤師教育推進において関係をもっていました。また研究面においても、高石学部長と私は UNC 薬学部の Lee 教授の研究室に在籍していた経験があり、これまで同教

授と長年にわたり共同研究を行っていました。このような背景から、高石学部長が薬剤師教育及び研究の両面において本学薬学部と UNC 薬学部の交流をさらに深めることを発案され、昨年1月に学部間協定締結の会談のため高石学部長、土屋教授と私が UNC 薬学部を訪問しました。その後、土屋教授が UNC 薬学部の Williams 准教授と細部の折衝を行い調印の運びになりました。

ノースカロライナ大学は、1789年に開校された全米最古の州立大学で、本校 (チャペルヒル校) はチャペルヒル市という人口約45,000人、住民の過半数が学生と大学の職員・スタッフという文教都市にあります。大学はチャペルヒル校を中心として17大学から構成されており、チャペルヒル校には71の学部プログラム、107の修士課程、74博士課程のプログラムがあり、学生数は約27,000人、47カ国から留学生の受け入れを行っています。薬学部は1897年の設立で、米国では最も古い薬学部の一つです。現在、550名の学生と100名の大学院生が在学しています。私は、1989年～1995年の間 UNC 薬学部 に在籍していましたので個人的に非常になじみ深い大学です。

米国での6年制の薬剤師教育は1950年代に Doctor of Pharmacy (Pharm. D) の学位が Ph. D とは別に設置されたところから始まっていますが、私が UNC 薬学部 に在籍していた当時は、定員100名の5年制の薬剤師プログラムと定員15名の6年制の Pharm. D プログラムが行われていました。1996年夏に UNC 薬学部 を訪問した時に、次年度から120名の新しい Pharm. D プログラムが開始されるとの話を聞きましたが、これは1992年に米国薬科大学協会が薬剤師の資格を Pharm. D の学位に統一することを決定したことにもとづくもので、これを機に UNC 薬学部 ではさらに臨床薬剤師教育に重点がおかれ、大きく変化したと感じました。

昨年と今回の訪問で私が滞在していた時期の UNC 薬学部 と大きく変化していたところは、教育面では、映像データ通信設備が整備された講義室等がある新棟が建築されるとともに、IT



調印式の高石学部長と Blouin 学部長

を駆使した独自の教育プログラムを構築されていた点で、講義は州内の分校でも同時に受講できるだけでなく、討論に参加出来るという新しい教育システムは非常に印象的でした。また、研究面においても薬学部内で創薬から臨床応用までの効率的な研究ができるよう組織が合理的に整理され、研究環境が整備されるとともに、さらに多くの優秀な研究者が集められ活発な研究が行われていました。特に2003年から就任した Blouin 学部長になってからの変化は大きく、1998年には7位だった US news & World report 誌による全米薬学部におけるランキングが2008年には3位にランクアップされています。また、国立衛生研究所 (NIH) からのグラント獲得額も、2008年には1,680万ドルで2005年の約3倍にもなっています。またさらに今回の訪問では、創薬研究を目指した Generic Medicine Building という新しく完成した研究棟も見学しました。まだ一部の研究室しか移転していませんでしたが、合理的に構成された実験室と居室など大規模なもので、薬剤師教育のみならず研究面における設備の充実も目を見張るものがありました。

今回の部局間交流協定締結により、臨床薬剤師教育プログラム、研究者、大学院生などの UNC 薬学部 との交流推進が、徳島大学薬学部が薬剤師教育並びに研究の両面で発展につながればと期待しています。



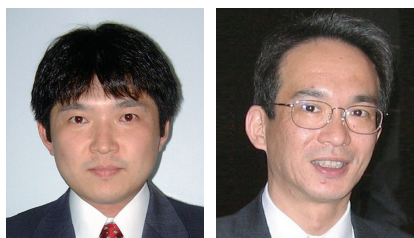
UNC 薬学部の講義風景



Genetic Medicine Building

学術交流

ソウル国立大学校薬学大学との学術交流を終えて



薬物動態制御学分野 准教授

石田 竜弘

機能分子合成薬学分野 教授

大高 章

Tatsuhiro Ishida, Akira Otaka

平成21年3月16日(月)から18日(水)にかけて3日間、ソウル国立大学校薬学大学を訪問し、セミナーを行うなど学術交流を行ってきました。同大学とは平成2年より学術交流協定を締結し、定期的に各々訪問しあうなど、交流につとめてきています。今回は機能分子合成薬学分野の大高教授とともに、薬物動態制御学分野の石田が訪問いたしました。

ソウル国立大学校は韓国で最も難関といわれている大学であることはあまりにも有名です。キャンパスはソウル市内にあります。2つに分かれていて、中心部にあるのは医科大学と附属病院、薬学大学があるGwanakキャンパスはソウル中心部から南に車で30分ほどのところにあつて、もともとは財閥所有のゴルフ場であったという山を切り開いた広大かつ風光明媚な環境にあります。韓国の大学組織は日本とは異なり、いわゆる部局制ではなく、単科大学を束ねるかたちでソウル国立大学校が存在しているようです。わかりにくいかもしれませんが、ソ



セミナーを行う石田准教授

ウル薬学大学・ソウル工学大学・ソウル体育大学…を束ねているのがソウル国立大学校で、徳島大学でいえば各学部を束ねる新蔵地区にある本部がソウル国立大学校といえるかもしれません。日本の制度と最も異なる点は、各大学(日本でいう各学部)の独立性が高く、ソウル国立大学校を離れかなりの部分で独自の運営が行われているという事です。

ソウル大学校では日本の大学と同様、産学連携が活発に進められています。ただ、大きく異なる点は、サポート体制の有無にあるように感じました。大学内にはベンチャーを立ち上げた教官が使うことができるスペースが用意(10階建て以上の独立したビル)され、ある程度の初期費用も大学から支給されています。また、薬学大学内に製剤をつくるための工場が作られており、もちろん当初は製剤実習のための設備だったようですが、ベンチャー企業の製剤化研究にも使用されており、実際いくつかの薬品がこの施設でまずつくられたのだと、案内をしてくださったLee, Bong-Jin 副大学長から説明がありました。施設を維持するために数人の専門職員が雇用されてもおり、サポート体制の充実を非常にうらやましく思いました。もちろんソウル国立大学校は韓国の雄ですから、一見国からのサポートも厚いように思われました。しかしながら、韓国国内では優遇されすぎであるという意見もあるようで、国からのサポートは減らされる傾向にあり、国に頼らないで大学校の運営を進めるためにSuh, Young-Ger 薬学大学長、Lee, Bong-Jin 副大学長は日々奔走されているとの事でした。

韓国でも日本と同様に薬学教育改革が進められており、6



ソウル国立大学校薬学大学

年制(2+4)や8年制(4+4)の是非が議論されているようです。ただ、前文で記載した年限からも分かるように、日本で採用された6年制とは異なり、韓国独自のシステムの下、改革が進められています。これは韓国で薬剤師に求められるものと、日本で求められるものが違うからではないかと個人的には感じました。薬学大学では定員が120名から80名、さらには62名にまで減らされてきており、我が国がたどっている薬剤師大量養成とは異なる流れの中で教育改革が進められています。今後もソウル国立大学校薬学大学と親密な交流を続け、両国間での薬学教育制度の推移および検証を進めていくことで、本来の目的である「学術交流」のみならず、よりよい薬学教育制度の構築および徳島大学独自の薬学教育システムの構築につながるのではないかと強く感じました。

今回の交流事業として、本年11月から来年1月にかけてソウル国立大学校薬学大学より2名の先生をお迎えすることになっています。



薬学大学長室にて記念撮影

退任挨拶



徳島大学名誉教授

木原 勝

Masaru Kihara

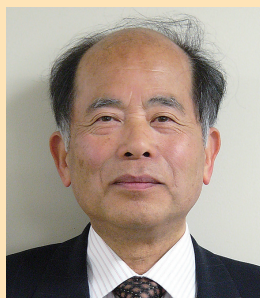
昭和43年4月に母校薬学部にて奉職し、今春定年を迎えました。教員生活41年である。昭和37年製薬化学科1期生として入学以来都合47年間徳島大学一筋にお世話になり、昔風に言えば「人生わずか50年」近くを母校で過ごしたことになります。この間大学教育制度の改革に何度も遭遇し、今また薬学教育制度の大改革中で本学部の変遷をずっと見続け、教育・研究に携わってまいりました。校舎、教育内容、学生気質全てにおいて隔世の感があります。ご存じない方も多いと思いますのでこの変遷を懐古的に振り返ってみます。

特に印象的なことは、製薬技術者養成を謳った製薬化学科第1期生のうち3分の1が薬剤師資格は必要ないと表明しましたが、卒業時には全員受験したことであり、取れるものなら取りたいと思うのは昔も同じでした。3年次学生時の東京オリンピックでは、初めて見るカラーテレビの青空に万国旗がはためく鮮やかな画面と「今日の主役は太陽です」というNHKアナウンサーの激白する名文句が今もはっきり思い出されます。また教員になった当初に大学紛争が吹き荒れました。昭和43年には徳大でも医学部が過激派に封鎖され、次は薬学部かも知れないと大騒ぎになりました。

封鎖される前に建物内部から机や椅子を積み上げ逆封鎖し、学生と教職員が実験室に泊まり込み警戒したことも懐かしい思い出の一つです。また、このような流れの中から助手会からの要望で全教官が参加する教官会議が設置され、今もこの制度は職員会議として続いています。

昭和47年には新しい建物が建設され、昭和62年大学院博士課程が設置されました。平成8年に大学院医療薬学専攻の設置に伴い開設された医薬品情報学講座を担当することになり、同時に薬剤師養成教育充実のための長期実務実習が開始され、病院・薬局の全面的なご協力、ご支援をいただきました。平成16年度の国立大学法人化と同時に大学院統合化、さらには平成18年度から薬学教育6年制がスタートし、多くの新しい薬剤師養成教育や関連事業が実施されたことはご存じの通りです。

今改めて思うことは、先輩、同僚、友人、学生の皆様に「ささえられた41年」であり、幸せな教員・大学生活を送れたことは本当に有り難く感謝の気持ちで一杯です。今は誠に多難な時代ですが、薬学部ならびに先生方のご発展と学生さんの発奮を唯ただお祈り申し上げますのみです。



徳島大学名誉教授

嶋林 三郎

Saburo Shimabayashi

■1986年以来23年間の徳島

1986年5月に徳島大学薬学部の助教授として赴任して以来23年が経ちました。正確に言うと22年と11カ月です。長いようで短く、短いようで長い23年間でした。当時は大学院博士課程を設置する準備が進められているときであり、私自身の着任よりも先に、履歴書と業績目録を亀谷先生にお届けして申請調書を作成していた

いただきました。亀谷先生も私も「マル合」の認定を受けて大学院教員となり、大学院での教育研究活動が始まりました。早速インドネシアのH. Bangun氏が入学しました。1991年3月に亀谷先生は定年の掟によって退官され、翌年1992年1月に私が教授に昇任いたしました。当時の研究室の名称は薬品物理化学研究室でしたが、のちに物理系薬学分野の強化のために嶋林は製剤学の看板を掲げ、薬品物理化学の研究室には

退任挨拶

新しい物理化学分野の教員を迎えました。

それ以後、研究室の看板は「製剤設計科学」、「製剤設計薬学」などと変遷しましたが、やはり一番初めの「薬品物理化学」の看板に一番の愛着がありました。もちろん今もあります。その間に助教授として宇野公之博士（現・大阪大学大学院教授）、日野知証博士（現・金城学院大学教授）を迎え、現在は植野哲博士が准教授をつとめています。助教授としては、私の理解できる領域内でしかも私の研究テーマを超える新しい分野を開拓できる若手を求めてきました。ある方からは「私の研究室の力が弱まるから、助教授の研究分野を狭く限定した方がよい」との忠告を受けましたが、むしろ分野の異なる方を迎えた方が教育と研究

の間口が広まり教育効果も高まるのではないかと考えました。結果的には大成功で、研究室のこれまでの卒業生約120名はいろんな分野で大活躍をしています。これは「教員・研究テーマ・学生の適性」のフィッティングの可能性を広く準備できたためでしょう。

今は薬学の教育制度の過渡期です。今後どのように進展していくかを現場で見届けられないのは心残りですが、これは後輩の若い先生方に委ねましょう。「世界に冠たる我が徳島大学」と世間で自信を持って言えるまでの発展を期待しています。先生方だけでなく、後輩の学生諸君も気合を入れて学習と研究に励んでください。のちのことしりたや。



徳島大学名誉教授
(株)マイクロバイオテック
代表取締役会長

樋口 富彦

Tomihiko Higuchi

昭和48年4月に本学部へ赴任して以来、多くの方々に助けていただき、研究と教育生活を楽しませていただきましたこと、感謝いたしております。

私の最終講義のタイトルは、『皆様に支えられ“夢”を追求した36年間 – “インフルエンザ殺ウイルス剤 MBT-Almighty® の実用化に向けて”』でした。MBT-Almighty® の創製に16年間を要しましたが、今後も皆様にご支援していただき、“実用化に向けた挑戦”を致したく存じております。

1922年の創立以来、脈々と流れている本学部の伝統である、自由闊達な雰囲気と研究をこよなく愛する方々と共に励むことが出来ましたことを誇りに思っております。

1983年のノーベル医学生理学賞受賞者の米国の遺伝学者であるマクリントック博士の研究者としての態度生き方について紹介させていただきますと、“その対象と自

己が一体となることが如何に大切であるか”を教えてくれています。“その一体感の中から生まれる正しい直感が、科学を飛躍的に発展させる”ことができることを体験的に示されています（動く遺伝子 ケラー著 石立三枝子他訳 晶文社）。それでは、対象と自己が一体となるためには、どうあるべきでしょうか。その答えは、次のThe Secret に書かれています。

Everything that's coming into your life you are attracting into your life. And it's attracted to you by virtue of the images you're holding in your mind. It's what you're thinking. Whatever is going on in your mind you are attracting to you.

Every thought of yours is a real thing-a force.

(The secret By Rhonda Byrne, ATRIA BOOKS, Beyond Words Publishing より)

皆様の益々のご活躍をお祈りいたします。

新任挨拶



海洋資源薬学分野 教授

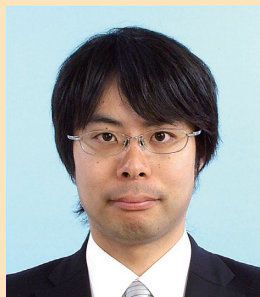
南川 典昭

Noriaki Minakawa

平成21年4月1日より、楠見武徳教授の後任として、徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部 創薬資源学部 医薬資源科学講座 海洋資源薬学分野（分野名については研究内容の関係上、変更させていただく予定でした）を担当させていただきますことになりました南川典昭（みなかわ のりあき）と申します。研究者として優れた実績を残されただけでなく、人間的にも素晴らしく学生からも慕われた楠見先生の研究室を引き継ぐことになり、責任の重さを実感しています。

さて私は、1983年に北海道大学教養部理Ⅱ系に入学し、翌年に同大学薬学部に移行いたしました。その後、大学院修士課程2年生の時に教務職員として北海道大学薬学部採用され、学生時代を含めて26年間、北海道大学でお世話になりました。北海道大学薬学部は、日本の核酸化学の発祥の地と言われています。私も研究生活をス

タートさせて以来、創薬を指向した核酸化学研究（ヌクレオシド、ヌクレオチドおよびオリゴヌクレオチドの化学）に従事してきました。特に最近の10年間は、アンチセンス法やRNA干渉法などによる遺伝子発現抑制に基づいた核酸創薬研究に、有機化学的なアプローチから取り組んできました。新天地の徳島大学では、これまでの経験と実績を活かし核酸医薬創製研究をさらに発展させるとともに、ヘルスバイオサイエンス研究部という研究組織の利点を活かした創薬研究にも積極的に取り組んでいきたいと思っております。また学部ならびに大学院教育にも誠心誠意努力し、徳島大学薬学部・ヘルスバイオサイエンス研究部の発展に微力ながら貢献したいと考えておりますので、皆様のご指導とご鞭撻のほどを宜しくお願い申し上げます。



分子創薬化学分野 助教

中尾 允泰

Michiyasu Nakao

平成21年4月1日より、徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部 創薬資源科学部門 機能分子創製学講座 分子創薬化学分野（旧薬化学）の助教を担当させていただくことになりました。私は、平成16年に本学薬学部を卒業後、同大学院分子創薬化学研究室において長尾善光教授（現徳島大学副学長）ならびに佐野茂樹教授の御指導のもと「酵素反応を用いる α -置換セリン誘導体の不斉合成ならびに絶対配置の決定に関する研究」に取り組んで参りました。創薬化学の発展に対して有機化学の役割は大きく、その中でも高度に官能基化された不斉4級中心の効率的な合成法および従来法の適用限界にとらわれない広範囲の α -アミノ酸の簡便絶対配置決定法の開発は極めて重要な研究課題であります。このような考えのもと大学院で本研究に5年間取り組んだ後、今年3月に学位を取得し、現在に至ります。大学院での研究

成果を基盤とし、今後は「分子構造特性に基づく新規機能性分子の創製」をキーワードとして研究を展開していきたいと考えます。有機化合物自身がもっている構造的特性を見逃すことなく、その特性を積極的に活用し新しい機能をもった分子を創り出すということは、有機化学的な観察力、合成力が必要不可欠であるとともに非常にやりがいのある研究であります。一方、薬学6年制のスタートにともない、社会に対して薬学部が担う役割はこれまで以上に大きいものとなりました。まだまだ未熟者ではございますが、今後は一教員として分子創薬化学分野の佐野茂樹教授と協力し、創薬研究者にふさわしい人材を育成し徳島大学薬学部の一層の発展に寄与できるよう尽力する所存でございます。皆様のご指導ご鞭撻を賜りますよう宜しく申し上げます。

学生の活躍

■第14回 西日本コメディカル学生バドミントン大会 ミックスダブルス優勝



創製薬科学科 3年

辻 耕平

Kohei Tsuji

第14回西日本コメディカル学生バドミントン大会が、2008年夏、ここ徳島において開催されました。徳島大学蔵本バドミントン部に所属する私は本大会において一選手としてだけでなく、主幹大学の総責任者として大会運営に携わりました。

部員全員で半年前から準備に取り掛かり、ついにその日を迎えました。西日本レベルの大規模な大会運営は、私たちにとっても初めてのことでした。自分の試合に加え、種々雑多な情報の中での大会運営は普段の何倍もの大変さでした。

この大会には男子シングルス、女子シングルス、女子ダブルスに加え、大学生の大会には珍しいミックスダブルスがあります。ミックスダブルスという言葉は聞いたことがない人も多いかもしれません。ミックスダブルスとは男女ペアで行うダブルスの事で、オリンピックの正式競技種目にもなっています。ミックスダブルスは一年を通してこの大会でしか

行われておらず、普段男女別に練習をしているため十分な練習時間がありません。夏休み前のテストのため、さらに練習時間は減ってしまいました。

また、一選手と

しても本大会に参加していたため、大会の総責任者として全体を常に把握することは困難でした。大勢の人に指揮し、取りまとめることはこんなにも大変な事なのかとつくづく感じました。しかし、この経験を経てリーダーシップというものを学ぶ事が出来たと思います。そして、この経験はきっと将来役に立つと思っています。

さて試合成績の方ですが、幸いなことに、私はミックスダブルス優勝、男子シングルス準優勝という好成績を残すことができました。これもひとえ



に、たくさんの仕事を何一つ嫌な顔せずこなしてくれた後輩達、必死に応援してくださった先輩方のおかげと思っています。

最後になりましたが、このような機会を与えて下さった先生方、蔵本バドミントン部の皆さん、そして本大会に協賛して下さった大塚製薬様、YONEX様に深く御礼申し上げます。結びの言葉とさせていただきます。



薬学部関連ニュース

■ 学部長特別賞を受賞



大学院薬科学教育部博士前期課程
創薬科学専攻 平成20年度修了

津田 修吾

Shugo Tsuda

➔ の度は特別賞、またこのような機会を頂き、高石学部長をはじめ、関係者の方々に感謝申し上げます。

我が恩師、大高章先生から「薬学部だより」にアツイ事を書いてくれと依頼を受けましたので喜んで書かせていただきます。

大高研に配属することになったきっかけは三年生の研究室紹介の時でした。それまではなかなか勉強もせずに、野球か酒かという生活を送っていましたが、真剣に将来のことを考えた結果、誘惑に弱

い私はある程度束縛のある研究室（いわゆる、「忙しい」と言われる研究室）へ進むことを決意しておりました。そして、研究室紹介を聞いた単純な私は、大高先生の「一緒にサイエンスの美しさに共感しよう」という言葉に感銘を受け、大高研しかないということで配属することになりました。

私の研究室生活での思い出は、一言でいうと「苦」です。大高研は噂通り忙しい研究室で来る日も来る日も実験が待っていて、うまくいかない実験を泣きそうになりながら何カ月も毎日やりました。しかし、数週間である程度のデータが出て何をやってもデータがたまるという「楽」な経験もあり、わずかながらに「サイエンス」を堪能させて頂きました。おそらく、どんな仕事に就いたとしても「苦>楽」になるのではないかと、その「苦」の中でのどのように「楽」を見つめるのが生きる上での課題であるというのが私の自論です。皆さんも研究や生活の中で「楽」を見つけて欲しいと考えています。

私が講演会や修論で質問をするようになったのには理由があります。第一に、大高研でのセミナーの習慣によるもので

す。大高研では自分の研究分野外で文献紹介をします。興味がある文献はいいのですが、興味がない文献も紹介されます。その中で学年の若い順に全員が質問をしていくわけですが、学年が上になると恥ずかしい質問ができなくなります。そのため、例え興味がなくとも真剣に聞いていないと質問はできません。そこで他分野でも質問をする癖が培われてきます。また、第二に、文献を読まなくても一つの知識がタダで手に入ります。実験をやっている本人に直接質問が可能なので質問をしたほうが理にかなった答えが聞けます。

また、徳島大学では定期的によく講演会が開かれています。講演会では学生は年の若い人間です。どんな質問でも興味が沸けば質問をすべきであると思います。一度、講演者に質問をすると癖になってしまいます。笑

結局は自分が賢くなりたいから質問をしていただけなんです、特別賞を頂くことになり大変光栄に思います。皆さんもバシバシ質問をして、徳島大学での講演会を盛り上げてください。さらに修論では金一封もあるのでどんどん質問してください。

学会等案内 (平成21年5月下旬～平成21年12月)

- 学 会 名 : The Second French-Japanese Workshop
on Computational Methods in Chemistry 2009
- 開催責任者 : 中馬 寛、Alexandre Varnek (ULP Strasbourg, France)
- 日 時 : 11月28日、10:00-18:00、2009
- 会 場 : Nishinomiya City University Exchange Center (西宮市)
- 問い合わせ先 : 中馬 寛
- T E L : 088-633-7257
- E-mail : hchuman@ph.tokushima-u.ac.jp

各賞受賞

- 日本薬学会 中国四国支部学生奨励賞
庄司 康伸 (4年)
横山 宏典 (M2)
吉村 祥 (D2)
- 日本薬剤学会永井財団
大学院学生スカラシップ
Abu Lila, Amr Selim (D2)

編集後記

薬学部新教育制度の学生の学科配属も無事終了し、本年度より新制度下での教育が本格化します。これを踏まえ、今回は落合創製薬科学科長、滝口薬学科長のお二人からご挨拶を頂きました。新制度下での教育、研究体制が軌道に乗るかどうかが、薬学部教員に課せられた責務には大きなものがあります。この時

期、4人の先生がご退職をお迎えになったことは、薬学部にとって大きな痛手です。薬学部便り、HPをつうじて、学部の現状の発信に努めて参りたいと考えております。益々のご指導、ご鞭撻を望む次第です。

(薬学部広報委員長 大高 章)

発 行 : 徳島大学薬学部
編 集 : 薬学部広報委員会
広報委員 : 大高 章、福井裕行、植野 哲、吉田達貞

URL : <http://www.ph.tokushima-u.ac.jp/>
〒770-8505 徳島市庄町1丁目78-1
徳島大学医学・歯学・薬学部等事務部総務課第三総務係
E-mail : isysoumu3k@jim.tokushima-u.ac.jp

●皆様のご意見、ご要望、エッセイ、写真、絵画、漫画などご投稿を歓迎します。どしどしご応募下さいませよう御願いたします。次回の発行は、平成21年の12月を予定しております。なお、広告を広く募集しております。